

<論文>

台湾人日本語話者の敬語意識: PAC分析(個人別態度構造分析法) を用いた事例研究

藤原智栄美

要旨

本稿の目的は、台湾人日本語話者¹が「敬語・敬語使用」に対していかなる意識を持っているのかを探ることである。方法論として、個人の意識を探るための心理的アプローチであるPAC分析(個人別態度構造分析法)²を用いて得られた自由連想項目及びインタビュー内容の分析を通して、敬語意識の共通性・傾向性について考察した。分析の結果、日本社会における礼儀、マナーに対する肯定的評価は、それを表す手段としての敬語に対する肯定的イメージを形成する要因となっていることが示唆された。調査対象者の自由連想項目は全体的に否定的イメージが多く、敬語体系及び適切な使用の難しさ、尊敬語・謙譲語の使用に対する心理的距離及び使用のプレッシャーに向けられており、日本の敬語を簡素化すべきとの意識形成に結び付いていた。また、日本人との相互作用等の具体的経験が敬語観に影響を与える様相が確認された。

キーワード: 台湾人日本語話者、敬語意識、PAC分析(個人別態度構造分析法)、自由連想項目、事例研究

-
- 1 台湾人日本語使用者と定義する。本稿の調査対象者は全て高等教育機関における日本語学習経験を持つが、現在の学習の有無が様々であるため、「日本語学習者」ではなく、この用語を用いた。
 - 2 PAC分析は、「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、当人によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者による総合的解釈を通じて個人別にイメージ構造を分析する方法」(内藤 2004)である。

台湾人日本語話者の敬語意識:PAC分析
(個人別態度構造分析法)を用いた事例研究

1. はじめに

筆者は台湾に4年間滞在したが、その間、日本人と台湾人日本語話者の接触場面におけるコミュニケーション上の誤解をしばしば目にしてきた。その一つが台湾人日本語学習者の日本語での待遇レベルの選択に関するものである。例を挙げてみよう。ある年輩の日本語教師に日本語学習者が「先生、おはよう」と挨拶をしたところ、その教師が「おはようございます、です！」と怒って訂正をしたとのことである。また、筆者自身、初対面場面での、ある台湾人日本語話者(大学で日本語を専攻)の普通体の使用頻度の高さに戸惑った経験がある。これらの例は、丁寧体の使用・不使用に関する話者間の期待・認識の差異に関連している。コミュニケーションにおけるこうした待遇レベル選択は、話者間の Rapport Management (Spencer-Oatey 2000) の一つであり³、対人関係に影響を与える重要な要素である。中国語は、日本語のように複雑な敬語体系が構造化されていないため、台湾人日本語話者にとって、常に待遇レベル選択が求められる日本語のコミュニケーション上の特徴は、習得が難しい要素の一つであるといえる。そこで本稿では、そうした待遇レベル選択の核といえる「敬語」の使用について、台湾人日本語話者がいかなる意識を持っているのかを考察する。様々な要因により影響を受け変化していく「意識」については、量的研究ではその様相を包括的に捉え、意識を形成するイメージ構造を深く探ることは難しい。よって分析の手法として、近年、心理的アプローチの一つとして日本語教育分野で援用されるようになった「個人別態度構造分析法」(以下、PAC 分析)を用い、台湾人日本語話者の敬語使用意識及びその意識の形成に関わる背景及び要因を探っていくことにする。

2. 調査

調査は2010年2月から2011年1月にかけて、日本及び台湾で行われた。本稿において分析の対象者とする調査協力者は、台湾人日本語話者4名⁴である。いずれも、台湾の大学の日

3 Spencer-Oatey(2000:19-20)は話者間の Rapport management が機能する領域(domain)を5つに分類しているが、敬語使用は「スタイル領域(stylistic domain)」に関わるものとしている。

4 本稿における調査対象者は、台湾の大学の日本語学科において日本語を学び、調査時は日本に長期滞在中であり(日本の大学・大学院に籍を置いている)、日本語の学習環境及び調査時の日本語使用環境面での共通点を持っている。尚、日本語能力については、インタビューが可能な中級後半・上級レベルの話者を対象とした(日本語能力試験については、BとCは1級合格、Dが2級合格、Aは未受験である。)

本語学科において日本語を学習した中・上級の日本語話者である。また、全員が日本での留学経験を持っており、滞日年数は6ヵ月～8年にわたる。本研究では、調査方法としてPAC分析法を用いるが、同分析法は調査対象者が自由に連想項目を作り出すため調査対象者の自発性・自律性が尊重され、個々の対象者の内面世界を認知的かつ情意的観点から捉える手法である。操作的手続きや多変量解析による分析を取り入れた客観性の高い分析法であり、少数事例を詳細に分析できるのが最大の特徴である。調査はPAC分析の手順に従い、以下のように行われた。

- ①「あなたは敬語や敬語使用に対してどんなイメージを持っていますか」という刺激文について調査協力者が自由連想した言葉やイメージを一つずつカードに記入してもらい、重要だと感じる順位を記入してもらう。
- ②自由連想の項目同士がどの程度近いかを7段階尺度で評定してもらう。
- ③この回答を基に各イメージ間の類似度距離行列を得、それをクラスター分析(ワード法)で処理し、デンドログラム(樹状図)を作成する⁵。
- ④その結果に対する調査協力者自身の解釈をインタビューで求める。
- ⑤調査者が総合的解釈を行う。

3. 分析結果

これより調査対象者のデンドログラム⁶に関する分析を行っていく。

3.1 調査対象者 A

まず、調査対象者 A の分析結果について述べる。A は、日本の大学院の修士課程に在籍している20代女性で、日本滞在歴は約2年、日本語学習歴は6年である。図1は、A のデンドログラムを表したものである。自由連想項目数は10で、A はこれらの項目を3つのクラスターに分けた。

⁵ 使用ソフトは、Halwin version 6.2 である。

⁶ デンドログラムの左に書かれた数字は重要度の順位を示し、+・-・0 は、項目に対する評価(+:肯定的、-:否定的、0:どちらとも言えない)を示している。

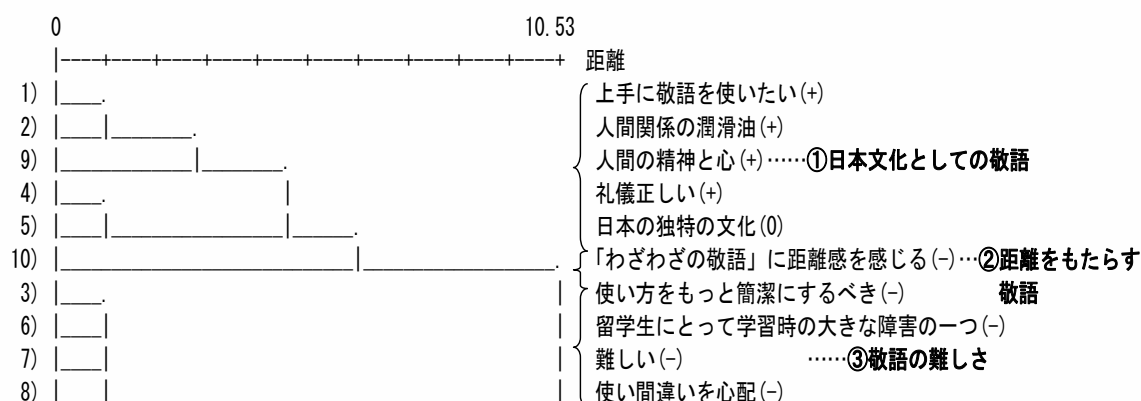


図1 調査対象者 A のデンドログラム

クラスター1は、「上手に敬語を使いたい」「人間関係の潤滑油」「人間の精神と心」「礼儀正しい」「日本の独特の文化」の5項目である。A はこれを「日本文化としての敬語」と命名した。A は、台湾において教科書や授業で基礎的な敬語の規則を学んだが、「日本に来てから本当の敬語を深く学んだ」と述べている。「上手に使いたい」「人間関係の潤滑油」という連想項目が形成された背景には、来日後、普通体の使用頻度の高さを教員に指摘されたことがある。

先生なのに友達同士のように普通に喋ってた。それは、だめだと分かるんですけど、普通体と敬語の切り替えが難しくて、先生と喋る時は普通体が駄目だと分かるのに、つい出てきて。(注意を受けた)その時はちょっと衝撃で、本当に人間関係がうまくいくためには、ちゃんと敬語を使った方がいいかなと思った。

A は、来日後、具体的な場面の中で敬語を使用するにつれて、日本社会の中で人間関係促進を作用する手段としての敬語を強く認識したと語っている。また、「敬語は単に言葉、道具じゃなくて、人の心を表すもので、人の精神と深く関係がある。相手に対する気持ちと、相手が私をどう思うかという気持ち。気持ちと気持ちのやり取りが含まれる」と述べ、敬語を単なる言語体系として捉えるのではなく、敬語使用の心理的な側面を強調している。A はそのような敬意の表明や礼儀正しさから「武士道」を連想し、日本の歴史と関係を持つ独特の文化が敬語であると解釈している。

クラスター2は、「わざわざの敬語に距離感を感じる」の1項目である。台湾の日本語授業で教師から「親しい人には敬語を使わない」という説明を受け、敬語使用は話者間の距離感を作

るものというイメージがAの中で形成された。来日後、親しい友人に「召し上がりませんか」と言われた際、友人が自分と距離を持ちたいのではと感じたことが「わざわざの敬語」に対する違和感につながったと解釈した。

クラスター3は、「使い方をもっと簡潔にするべき」「留学生にとって学習時の大きな障害の一つ」「難しい」「使い間違いを心配」の4項目で、クラスター名は「敬語の難しさ」である。このクラスターは全て否定的イメージとなっている。Aは「規則が複雑すぎて、なじめない。規則が多すぎるから、もうちょっと簡単にまとめてほしい」と敬語体系に関する心理的距離感を示し、敬語の難しさを受け入れたいが受け入れられない学習者としての立場・心情について語った。

次にクラスター間の関係について述べる。クラスター1とクラスター2は、どちらも日本の独特の文化に関するものという共通点があるが、クラスター1が日本の「社会における敬語」に対するイメージであるのに対し、クラスター2は自分自身、つまり「個人の意識」を示している。クラスター2とクラスター3は、敬語に対する違和感という意味で共通しているが、クラスター2は来日後の自身の経験に基づくのに対し、クラスター3は、台湾での学習時以来感じてきた日本語学習者としての気持ちだと解釈した。

3.2 調査対象者 B

次に、調査対象者Bの分析に移りたい。Bは、A同様、日本の大学院の修士課程の学生(女性)で、日本滞在歴は2年6ヵ月、日本語学習歴は8年である。デンドログラムに現れた自由連想項目は10で、クラスター数は2つである。

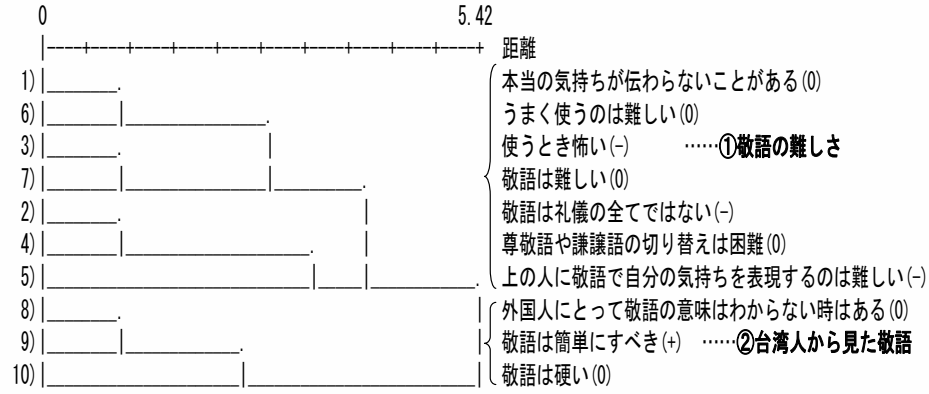


図2 調査対象者Bのデンドログラム

クラスター1は、「本当の気持ちが伝わらないことがある」「うまく使うのは難しい」「使うとき怖い」「敬語は難しい」「敬語は礼儀の全てではない」「尊敬語や謙譲語の切り替えは困難」「上の人に敬語で自分の気持ちを表現するのは難しい」の7項目で、Bはクラスター名を「敬語の難しさ」とした。Bは、尊敬語と謙譲語の使い分け、また、尊敬語・謙譲語と丁寧体(ですます体)の切り替えについて難しさを感じている。「中国語は尊敬語と謙譲語がないので、日本語は特別な感じ」と、中国語と日本語を対比させ、日本語の敬語使用の独自性を指摘した。また、敬語使用時に感じる尊敬語と謙譲語を使うことの「怖さ」を以下のように語っている。

(日本に)来たばかりの時は、日本語を使うのはすごく怖かったです。怖いから避けて、できるだけ「です・ます」を使いましたね。年の若い人だったら大丈夫ですけども、すごく年配の人だったりすると使うのが怖いです。

次にクラスター2について述べたい。「外国人にとって敬語の意味は分からない時がある」「敬語は簡単にすべき」「敬語は硬い」の3項目で、「台湾人から見た敬語」と命名した。Bは、尊敬語と謙譲語について、「周りの日本人の友だちもあまり使わないと聞いたので、あまり使わないんじゃないかと思う。『です・ます』だけで十分じゃないかなって気持ちもある」と語っている。「敬語を簡単にすべき」がプラス項目となっているのは、そうなった場合の状況を肯定的に捉えているためである。敬語の硬さについては、「何卒よろしくお願ひ致します」等の定型表現を例として挙げ、「形式的で、形にならないとだめ」というイメージがあると述べた。さらに、来日後に、敬語に対して感じた硬さから普通体を多用していたことを、以下のように振り返った。

(日本語を)勉強してドラマとかアニメとか見ると、やっぱり普通体の方が使いやすいって思いましたね。そのときは、(敬語に)硬いイメージがあったから。でも、(年上の知り合いから)いくら親しくても目上の人には「です・ます」を使った方がいいって何回も注意されました。

このように、A同様、Bも来日後の日本人とのインターアクションが敬語意識に影響を与えたと語っている。

クラスター間の関係については、どちらのクラスターも「意味が分からない。自分の気持ちを伝えられない」という自身の苦手意識が表れている点で共通しているが、クラスター1は敬語使用時の、自身の個人的心理状態であるのに対し、クラスター2は、台湾人にとっての敬語という、より広い視点での敬語観が示されていると解釈した。

3.3 調査対象者 C

続いて調査対象者 C の分析結果について述べる。C は、台湾の大学教員で、日本語学科で日本語を教える 40 代の女性である。8 年の日本滞在歴を持つ。最初に日本語学習を開始したのは 25 年前で、調査対象者の中でその期間が最も長い。他の調査対象者が学生であるため、調査対象者の属性の偏りを考慮し、C を調査対象者とした。C のデンドログラムに現れた自由連想項目は 15 で、クラスター数は 4 である。

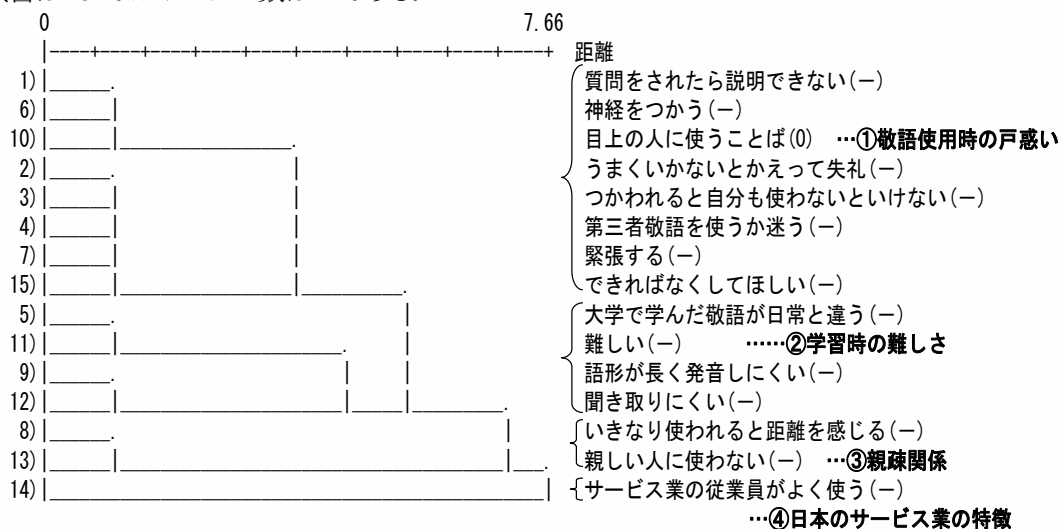


図3 調査対象者Cのデンドログラム

クラスター1は、「質問をされたら説明できない」から「できればなくしてほしい」の 8 項目である。「敬語使用時の戸惑い」というクラスター名から分かるように、C 自身、目上の人に対して尊敬語及び謙譲語を使用する際、気を遣い、緊張感を持っており、日本語の敬意表現については丁寧語のみでいいのではないかと感じている。

(敬語が)上手い人がきれいな敬語を使っていると人にいいイメージを与えるという考え方もある。逆に上手く使わないとかえって失礼ですから、怖くてね、できれば避けたい。

クラスター2は、「大学で学んだ敬語が日常と違う」「難しい」「語形が長く発音しにくい」「聞き取りにくい」の4項目で、「学習時の難しさ」としてまとめられている。難しさの例としては、「させていただけませんか」といった敬語表現は語形が長く聞き取りにくいこと、また「教科書の中の説明ではどの表現が多用されているか詳しい説明がない。どういう場面でどの敬語を使うかが難しい」と述べ、場面に応じた敬語使用の適切性に関する難しさを挙げている。

クラスター3は、「いきなり使われると距離を感じる」「親しい人に使わない」の2項目で、「親疎関係」と命名された。これは普段敬語を使わない日本人の友人が、突然 C に対して突然敬語を使用したことから想起されたイメージである。

クラスター4は、「サービス業の従業員がよく使う」で、クラスター名は「日本のサービス業の特徴」である。これは日本の買い物場面での店員とのコミュニケーションから形成されたイメージである。語形が長い敬語は聞き取りにくく、そこまで敬語を使わなくてもいいのではないかと感じており、それが否定的評価につながったと思われる。

次にクラスター間の関係についてであるが、クラスター1もクラスター2も使用・習得が困難な敬語に対する気持ちが表れているという点で共通しているが、クラスター1は場面に応じた適切な敬語使用に対する難しさであり、クラスター2は、言語形式を学習する際に感じる難しさである。クラスター1とクラスター3は、いずれも言語使用に関して述べたものであるが、クラスター1は距離のある相手とのコミュニケーション場面一般という総体的イメージであるのに対し、クラスター3は普段親しい相手からの突然の敬語使用という、C が実際に経験した具体的な言語場面から想起された連想項目である。クラスター1とクラスター4は、いずれのインタビュー部分にも、敬語を「なくしてほしい」という語が見られたが、クラスター1は、C 自身が敬語を使用する立場、クラスター4は敬語を使われる立場として語ったものである。クラスター3とクラスター4は、いずれも具体的なコミュニケーション場面に基づくが、前者は私的場面、クラスター4は公的場面である。

3.4 調査対象者 D

最後に、D の分析結果について述べたい。D は、台湾の日本語学科に在籍する 20 代女性で、調査時は日本の協定校への短期留学をしており、日本滞在歴は 6 ヶ月、日本語学習歴は 4 年(日本語能力試験 2 級合格)である。D が挙げた自由連想項目は 13 で、クラスター数は 3 である。



図4 調査対象者Dのデンドログラム

まず、クラスター1は、「サービス業が使う」「使うと第一印象がいいけど距離ができる」「本当の気持ちが分からなくなる」「人と人が親しくなれない」「礼儀正しすぎるのでプレッシャーを感じる」「外国人が一番目に習う日本語形式(ですます体)」の6項目で、クラスター名は「マナーと距離のバランス」としてまとめられる。このクラスター名には、敬語を使うとマナーが保たれるが、マナーを考えすぎると人と人の距離が遠くなるという意味が込められている。D は、大学でビジネス日本語の授業を履修していたこと、日本で服屋の店員としてアルバイトをした経験を持つことから、敬語に対しては、サービス業のイメージが強い。だが、敬語は言語形式として用いられても、本当に心の中で尊敬しているとは限らないと述べている。

クラスター2は、「日本文化=礼儀の国」「日本人はマナーを重視」「目上の人と話さないと悪い人に評価される」の3項目である。D は、日本は礼儀が最も重要で、それが表れたものが敬語だと述べている。それは、日本留学前から感じており、テレビ等を通して形成されたイメージだと解釈した。

クラスター3は、「難しい」「面倒くさい」「日本の若者も時々使い間違う」「外国人として使わない場合、許してくれる」の4項目で、クラスター名は「敬語は簡単にしたほうがいい」である。これは、尊敬語と謙讓語の語形に向けられた疑問である。また D は、アルバイト先で同僚の日本人の若者の敬語の間違いを年長の店長が指摘した場面を見て、「日本人でも間違うのだからもっと簡単にしたほうがいい」という気持ちを持ったと語った。

クラスター間の関係は、クラスター1とクラスター2は、「日本人のマナー」という点で共通しているが、クラスター1は否定的イメージが多いのに対し、クラスター2には日本の礼儀文化に向けられた肯定的イメージが含まれている。クラスター1とクラスター3は、どちらも敬語に対する D の距離感が示されているが、前者は日本での対人関係から生じた感情で、後者は敬語習得という観点からの学習者としての気持ちが表されている。

4. 総合的解釈

ここでは、それぞれの調査対象者に対する総合的解釈を行う。まず、A は、敬語イメージとして「礼儀」、「相手への配慮」、「日本の精神」を挙げ、敬語を日本文化独自のものとみなし、こうした連想項目を肯定的イメージとして捉えている。また、A は日本社会における敬語の持つ規範性を意識し、日本社会に受け入れられるためには習得が必要で、上手に使用したいと感じている。こうした意識は、来日後、大学院の教員による A の普通体の多用に対する指摘に対して衝撃を受けた経験や A が身を置くアルバイトドメイン(上仲 2007)を通して形成されたもので、日本に来て具体的な敬語使用場面の経験を重ねることで、自身の意識が変容していったプロセスを客観的に語っている。一方、敬語の規則については日本語学習者にとっての大きな障害の一つであると述べ、「なじめない」、「正直言って面倒くさい」等の否定的評価がなされている。日本社会への適応という面から習得が必要なものとみなしているものの、敬語に対する心理的距離は来日後も一貫して持ち続けており、そこに学習者としての A の葛藤が感じられる。

B が挙げた連想項目は、敬語使用時の自身の心理状態が中心である。B は、尊敬語と謙讓語の切り替えについて難しさを感じており、目上の人にそれを用いるときに感じる「怖さ」や敬語体系・敬語コミュニケーションから感じられる「硬さ」から、マイナスイメージが極めて強くなっている。こうした難しさは、自分だけでなく台湾人日本語学習者が共通して感じるものだと言

べ、複雑な敬語体系を簡単にすべきとの気持ちが表明されている。また、A と同様に、日本への留学後に経験した日本語母語話者との接触を通して、自身の普通体の使用頻度の高さを認識するようになり、待遇レベル選択の意識が変容していったと語った。

C については、神経を遣い緊張しながら、待遇レベル選択を行っている様相が自由連想項目やクラスター名に表れている。また、敬語の語形に対する使いにくさ、敬語使用による対人的な距離感についても違和感を持っており、全体的に否定的に敬語使用を捉えているのが窺える。尊敬語と謙譲語を「できればなくしてほしい」という連想項目も現れるなど、敬語に対する心理的距離が大きいことが分かる。

D のイメージの中では、D が日本文化の大きな特徴とみなしている礼儀と敬語使用が結び付けられており、サービス業の対応が良くマナーが重視されている日本イメージがそれを表す手段である敬語に対する肯定的評価と関連していることが示唆されている。D の連想項目には、調査時当時の日本でのアルバイト先の日本人と上司との相互作用を D が分析的に観察した結果として形成されたイメージが見られ、敬語を用いると親しくなれず、日本人の若者も使えない敬語がなぜ必要であるのかとの疑問を呈している。また、敬語体系及び敬語使用は難しく面倒くさいとの否定的イメージが「敬語は簡単にしたほうがいい」との敬語観が導かれる理由となっている。

5. 考察

本節では、調査対象者4名の自由連想項目及びインタビューに現れた内容を基に敬語観の共通性・傾向性を探るとともに、考察を与えていくことにする。表1は、4名が提示した自由連想項目数を示している。項目数は全部で48項目で、「肯定的」イメージが8項目、「否定的」イメージが29項目、「どちらとも言えない」が11項目となっている。

表1 自由連想項目に現れた敬語観

連想項目総数:48項目

肯定的 イメージ (8項目)	上手に敬語を使いたい(A)、人間関係の潤滑油(A)、人間の精神と心(A)、 礼儀正しい(A)、敬語は簡単にすべき(B)、サービス業が使う(D)、日本文化＝ 礼儀の国(D)、日本人はマナーを重視(D)
----------------------	---

<p>どちらとも いえない (11項目)</p>	<p>日本の独特の文化(A)、本当の気持ちが伝わらないことがある(B)、うまく使うのは難しい(B)、敬語は難しい(B)、尊敬語や謙譲語の切り替えは困難(B)、外国人にとって敬語の意味はわからない時はある(B)、敬語は硬い(B)、目上の人に使う言葉(C)、外国人が一番目に習う日本語形式(ですます)(D)、日本の若者も時々使い間違える(D)、外国人として使わない場合、許してくれる(D)</p>
<p>否定的 イメージ (29項目)</p>	<p>難しい(A、C、D)、「わざわざの敬語」に距離感を感じる(A)、使い方をもっと簡潔にするべき(A)、留学生にとって学習時の大きな障害の一つ(A)、使い間違いを心配(A)、使うとき怖い(B)、敬語は礼儀の全てではない(B)、上の人に敬語で自分の気持ちを表現するのは難しい(B)、質問をされたら説明できない(C)、神経を遣う(C)、うまくいかないとかえって失礼(C)、使われると自分も使わないといけない(C)、第三者敬語を使うか迷う(C)、緊張する(C)、できればなくしてほしい(C)、大学で学んだ敬語が日常と違う(C)、語形が長く発音しにくい(C)、聞き取りにくい(C)、いきなり使われると距離を感じる(C)、親しい人に使わない(C)、サービス業の従業員がよく使う(C)、使うと第一印象がよいけど距離ができる(D)、本当の気持ちが分からなくなる(D)、人と人が親しくなれない(D)、礼儀正しすぎるのでプレッシャーを感じる(D)、目上の人と話さないと悪い人に評価される(D)、面倒くさい(D)</p>

まず、調査対象者全員に見られた敬語観として、第一に「難しい」という項目が挙げられる。「難しい」という項目に加え、適切な場面での使用・意味の理解に対する困難さを示した項目数は、10項目に及ぶ。また、敬語の難しさから、自身の誤用を心配したり、使用時の緊張感、恐怖感などの心理的負担を示す項目が、調査対象者全員によって示された。これは、藤原(2011a)における「敬語の複雑性といった共通のイメージ項目が表れるとともに、尊敬語・謙譲語の使用に対する心理的距離及び使用のプレッシャーといった否定的イメージが見られた(19p)」という結果と一致する。

第二の特徴として、「距離感」という連想項目は否定的イメージとして現れる傾向が強かった。敬語使用は、親しみを感じにくい「疎の関係」にとどまる要因となり、相手の本音が分からなくなるなど、調査対象者にとって、親密さを築く上での壁として捉えられていると思われる。

共通して現れた第三の特徴は、調査対象者の連想項目及びインタビューに、敬語の簡素化を求める指摘が共通してなされたことである。A、B、D は、敬語をさらに簡単・簡潔にするべきであるとし、C はできればなくしてほしいと述べている。これは、前述した敬語体系及び使用の難しさ、敬語使用自体に対する調査対象者の心理的距離に加え、調査対象者が日本において日本人のコミュニケーションを観察し、自身が学んだ教科書での知識と実際のインターアクションのギャップを感じたこと(C)、日本人も使用を間違えているという意識(D)がその理由として挙げられる。韓国人日本語話者の敬語観について分析を行った藤原(2011b)においては、こうした敬語体系そのものを簡潔にするべきとの敬語観が観察されていない。そこでは韓国人日本語学習者の敬語観と敬語イメージの形成要因について、以下のように述べられている。

(調査対象者は)敬語を日本と韓国に共通して存在する文化の一つとして位置付け、「社会生活を営む上で身につけるべきもの」、「なくしてはいけない大切なもの」といったイメージを持ち敬語使用を社会生活を営む上での重要な文化的産物として捉える傾向があった。こうした肯定的意識には、母語である韓国語と第二言語である日本語の敬語体系の類似性が影響を与えているとともに、両者の敬語意識が相まって総合的な敬語イメージが形成されている可能性が示されているといえる。また、韓国での家庭における敬語教育等、日常生活に根差した韓国の社会文化的特徴とそれに対する肯定的意識も敬語観に影響を与えていると考えられる。

(藤原 2011b:250)

本研究における結果との差異の背景には、第一言語において敬語体系が構造的に組み込まれているかどうか、また第一言語での待遇コミュニケーションの様式が敬語観形成の要因となっている可能性が存在する。第一言語による待遇表現様式が第二言語でのコミュニケーション上の敬語意識にいかに関与するかは、今後さらに詳しく調査を重ねていく必要があるだろう。

その他の特徴として、肯定的イメージは 8 項目であったが、敬語が日本社会における礼儀、マナーと結び付けられる傾向があった。台湾人の対日イメージを探った藤原(2009)では、日本社会におけるマナーの遵守やサービス業の対応に対して台湾人日本語話者の肯定的イメージが強いという結果が得られている。そうした肯定的イメージは、それらの礼儀・マナーの伝達手段として機能する敬語に対する肯定的評価につながっていると思われる。また、調査対象者の語りには「日本文化＝礼儀」というイメージの強さが確認されたが、それを表す敬語自体、台湾の言語形式にはない、日本の独特のものとして捉える傾向が見られた。

6. まとめと今後の課題

本稿では、台湾人日本語話者の敬語・敬語使用に関するイメージを探ることで、調査対象者の敬語に関する意識構造に関する分析・考察を行った。日本語の敬語の構造的複雑さ、実際の使い分けの難しさに対して調査対象者は心理的距離及び使用のプレッシャーを感じており、そうした意識は、敬語自体を簡素化すべきとの意識形成に結びついていることが示された。また、インタビューにおいては、来日直後の普通体の使用頻度の高さが日本人との相互作用を通して変容していったことに対する調査対象者自身の客観的分析が見られた。こうした対人接触及び母語話者との相互作用のイメージ構造への影響は先行研究(藤原 2009、八若・藤原 2010、藤原 2011a)でも確認されている。意識の形成にはコンテキストを伴った具体的経験が大きく作用しており、敬語意識の形成も例外ではないと思われる。

敬語観という意識を探るため、本研究では方法論として PAC 分析を援用した事例研究を行ったが、今後、結果の一般化を導くためには、データ数を増やし、定量的アプローチからの分析を行っていくことが求められる。また、学習者の言語能力や日本滞在歴、話者の属性によって敬語観がいかに異なるか、敬語観そのものの時間的変容についてもさらに詳細に見ていく必要があるだろう。

(Fujiwara Chiemi 茨城大学留学生センター)

付記: 本研究は、平成 21 年～平成 23 年度科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号 21720183)による研究成果の一部である。

参考文献

- 上仲淳(2007)『中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルシフトとシフトに関する研究』大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文
- 滝浦真人(2008)「ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス—その語用論的相対性をめぐって」『社会言語科学』第11巻 第1号 23-38 社会言語科学会
- 内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門:「個」を科学する新技法への招待(改訂版)』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄(2004)『留学生の孤独感の個人別構造分析』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書
- 八若壽美子・藤原智栄美(2010)「Non-native 日本語教師の滞日イメージ—個人別態度構造分析法(PAC分析)による事例研究」『茨城大学留学生センター紀要』第8号 19-42
- 藤原智栄美(2009)「台湾人日本語話者の対日観に関する事例研究—個人別態度構造分析法(PAC分析)を用いて」『日本学と台湾学』第8号 1-23 静宜大学日本語文学系
- 藤原智栄美(2011a)「日本語学習者の敬語意識に関する事例研究」『茨城大学留学生センター紀要』第9号 19-42
- 藤原智栄美(2011b)「韓国人日本語学習者の敬語観に関する一考察」『ユーラシア研究』第8巻 13号 237-256 Asia-Europe Perspective Association
- 丸山千歌(2007)「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想—学習者とのインタラクションの解明に向けたPAC分析の可能性」『日本語教育のフロンティア—学習者主体と協働』161-184 くろしお出版
- 山下仁(2008)「グローバリゼーションと敬語研究」『ことばと社会:社会言語学再考』10号 136-158
- 横山詔一他(2008)「記憶モデルによる敬語意識の変化予測」『社会言語科学』第11巻 第1号 64-75 社会言語科学会
- Brown, P. & S, C, Levinson. 1987. Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, E. 1982 [1967]. Interaction Ritual: Essays on Face Behavior. New York: Pantheon Books.
- Spencer-Oatay, H. 2000. Culturally speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures. Continuum.